

生死煩惱の園林へ

「一切から離れて山の中へでもはいりたい」

人が集つて家庭を作り、社会を作り、その中でいじらしくも愛しあおうとして生きている。多くの人は、自分を殺して妥協して生きていくけれど、何時とはなしに自分という者に目覚めて来る。痛ましい人間同士の有様が見えて来ると、親の意見と自分の意見とが違ふ。妻が昔の妻ではなくなる。子供が親の思うようにならぬ。兄と弟との物の見方がちがう。それもよい。しかしいいようのない汚さ、呪わしき、愛しようとして愛し得ざる苦しさ、この真つ暗い心を何としよう。

「隠遁のころ」

遁れたい。この嫌な空気から逃げてゆきたい。家庭から出たい。家庭から出たつた一人静かな小さい庵にでも清らかに暮したい。何のなすこともなく全国を行脚して、何処をあてどなく流れて見たい。あるいは一切を棄てて、暗い社会のどん底に黙したままで生きて行きたい。こんな願いがあなたにはた時はなかつたでしょうか。

山の中にでも遁れたいころ、それは断じて人生を不真面目に渡る者の心に生れる心ではない。真剣な厳粛な心を持ったものには、必ず一度は味わねばならぬ心である。

若い時は無邪気であつた。何の用意もなく、何の策略もなく、人を真に愛しようとする。真の恋愛にも目覚めて来る。しかし、その愛が一度となく二度となく裏切られ、てしまう。力にしていた人の心も変つた。無二の友人も今は音沙汰もなくなつた。人一人をでも真に愛したことがある者は、必ずこの苦しいにがい味をなめねばならぬ。もし一度もそんな心が湧いたことがないという人があるならば、それは人生を茶化して通つた人なのだ。荒んだ心でいい加減な暮し方をして、寂しい心を何かでゴマ化すことになれて、ついには心の眼が盲になり、粗大な物の見方しか出来ないようになつた人なのだ。

隠遁の心は暗いものだ。とりとめようもない、いらいらした心を抱いて、光のない胸をみつめて、泣こうにも泣けない痛ましい心を味いつつ、それをどうにもすることが出来ぬ。ものも言いたくない。人にも会いたくない。一切からのがれたい。清らかな世界を懐れる。

親鸞も法然も、源信も、加藤左衛門も、それらの人たちは、心ばかりではない、ほんとに一度は隠遁した人たちである。釈尊もそれであつた。

浄土真宗は在家の宗教である。家を捨てなくても、欲からはなれなくてもいい宗旨である。山に入つたりすれば国も家もたたぬのではないか、と安つぽく真宗の機能を吹聴する人がある。それでほんとうに在家の宗教が有難いだろうか。それは卑しい物欲への妥協ではあるまいか。そもそもそうして心のうちに素純な仏心がひらめいているだろうか。

隠遁の心はさめた心である。暗い心である。而して尊い純一に燃ゆる心である。信仰の天地や精進努力の生れる第一歩である。

「あなたは、あなたの現状に平気でいられますか。」

「何とも別に。」

「悲しい日も寂しい心もありませぬか。」

「あまりありません。」

「愛する者に裏切られたこともありませんか。あつても平気なのですか。」

「何とも思つてやしません。」

「人間としてのあなたをもて愛ましたこともありませんか。」

「いいえ別に。」

「罪悪に泣いたこともありませぬか。」

「それもありません。」

「自分を愚者だ、あさましい者だと、愛想のつきたこともありませんか。」

「随分呑気なんですよ。そんなこと考えたこともないのです。」

そもそも生きているのか死んでいるのか。ここまで平気で呑気であり得るならば、最早たくさんである。心の盲目、盲に自分のほんとの姿と、世の実相とが見えようはずがない。こうした人には隠遁の心はまだない。

男と女と集つて夫婦になる。その夫婦が全ての中心である。夫婦には子供が出来る。やがて子供に又子供が出来る。こうして家庭が出来る。親類が出来る。近所が出来る。社会が形造られる。人々はそれらの中で、営々として生きていく。人と人とが呪いあわねばならぬ。人と人とが争いはじめめる。人と人が戦いあう。人と人とが殺しあう。暗い嫌な習慣や規則で傷つけられる。罪悪が行われる。かくして大地の上はちつともおちつかない、血みどろな五濁悪世になつてしまふ。目覚めて見れば、世の中が嫌になる。一切の関係をたつて、こうした世界から逃げ出して清い清い生活がして見たい。妻を棄てたい。夫から去りたい。全ての愛欲からはなれたい。そうして浮世はなれた静かな生活で、清い清い日暮しがして見たい。こうした心地が目覚めた人たちには一度必ず訪れる尊い気持である。しかしそれは聖者の態度であり、聖道の道行である。

尊い意義を見出さずには生きて行けないほど自分という者に目覚めた私には二つの道が与えられてある。眼をつぶつて清い懐れの世界を追えば、何のけがれもない、聖者の世界が見える。一切を棄てて山にかくれ、世間から遠ざかつて清い世界に住むことによつて、私を聖化する道である。京の街から叡山をながめた心、弓矢を棄てて高野山に登つた人たちの道行きである。

今一つは、在家の姿であるままの中に、農業を営み、商売で渡世し、呪いも戦いも、争いも全てがある今日このままの中に、尊いものを見出だして生きて行く道である。

前の道は聖道の道であり、後者は浄土の道である。前者は自力の道であり、後者は他力の世界である。一つは善人の道であり、一つは悪人と目覚めはてた人の道である。一つは自分を信ずる人の行く世界であり、一つは自分を見下げはてた者に与えら

れた世界である。一つは自ら美しい天上へ昇って行く道であり、一つは汚い醜い心を救ってもらう、救済の道である。

若い時、誰も第一の道を行こうとする。一切の汚さと戦って、地上からはなれて美しい世界に行こうとする。家庭からのがれて山に入ろうとする。無限の美しい幻を追って精進努力しようとする。若い者はそれと知らない聖道の行者である。

人生のあらゆる戦いに破れ、人間生活に疲れはてた時、人はそこから遁げ出して汚さのない戦いのない山を思う。目覚めた第一は必ず聖道の行者である。真面目に生きた者は必ず一切に愛想をつかさねばならぬ日が来る。自分に愛想をつかした者は必ず一度隠遁のころざしがおこつて、それと知らない聖道の聖者となろうとする。

トルストイが家庭を棄て、家族をすて、財産を棄てて、西シベリアに出て行つた心、加藤左衛門重氏が九州数ヶ国の領地や妻や可愛い子供石童丸を棄て、高野山に入った心。熊谷直実が弓矢を捨てて吉水の法然上人の教団に走つた心、身持ちの悪い夫や、喧嘩のたえない家庭をすてて、婚家から逃げ出して来る嫁の心、嫌な寺院の空気に飽いで寺院から出てしまつた若僧の心、商売に飽き、汚い生活に愛想つかして寺の役僧になつて見る男の心、親鸞聖人が栄達を棄てて叡山に登られた心、そうした心に動かされて出て行つた者が、全部光の理想世界を見出すことが出来たであろうか。

「先生私は、清い懐れの心を持つて、寺院生活がして見たいと念願致しました。けれどもその期待は裏切られてしまいました。寺院の中も亦俗境で、嫌なところのたくさんある所でありました。」と役僧になつた人の大部分が告白する。

「先生わたしは何の用意もなく結婚いたしました。しかし結婚して見て人の世の汚さをほんとに知りました。夫の人格がなつていませぬ。家庭が乱れすぎています。姑も人格の低い人でありましたので、わたしはのがれるようにかえつて来ました。」

「私は一切を棄てて、低い仕事の裏に高い世界、低い生活のうちの中に生活以上の高い光の世界を与えられると聞いて、京都の一燈園にまいりました。しかし私はやっぱり駄目でした。私の心は懺悔生活、托鉢の生活の中にも汚い心をどうすることも出来なかつたのでございます。」と告白する人がある。

隠遁の聖者の道に失敗してしまつた人たちである。何時頃であつたか新聞紙は尼僧長谷川舜海のことではぎわつた。舜海は女性である。彼女が大統院に入つて出家し尼になつた心は、清いあるものに輝いて、隠遁の尊い世界を求め、聖者のような生活を見出そうとしたのであるけれども、男僧たちとの間からまる問題のために、胸三寸に燃えあがる瞋恚嫉妬の炎を如何ともすることは出来なかつた。舜海尼はついに、僧院を焼いて、放火罪として獄中の人となつてしまつた。山の生活の失敗者の無惨なる実例である。

親鸞聖人は二十年の叡山の生活を続けられた。そうして自分を聖化して、さとり之道に出ようとせられた。実に二十年の祈りの生活、行の生活、全く血みどろであつた。学問に、修行に、祈願に、真剣なる聖道の生活を続けられた。しかしそれはましまと失敗におわつてしまつた。報恩講式には美しい文章をもつて表されてある。

「羅洞のかすみのうちには三諦一諦の妙理をうかがひ、草庵の月の前には瑜伽瑜祇の観念をこらす。とこしなへに明師にあうて、大小の奥蔵をつたえ、ひろく諸宗をこころみて、甚深の義理をきはむ。しかれども色塵・声塵猿猿のこころなほいそがはしく、愛論・見論麴膠のおもひいよいよかたし。断惑證理愚鈍の身成じがたく、速成覚位末代の機およびがたし。よて出離を仏陀にあつらへ、知識を神道にいのる。」

どうしても仏たる覚りも、明光も見えて来ない親鸞が、ちつとも魂の声をごまかすことが出来ないで、求めて行けば行くだけ暗くなる心をどうすることも出来ず、根本中堂の本尊に祈り、更に山を毎夜ぬけ出でて、三里半の道を通つて、六角堂の觀世音菩薩に祈念しなければならぬほど、せつぱつまつた心を使う時

「爰に倩出要を窺うてこの思惟を作さく、『定水を凝らすと雖も識浪頻に動き、心月を觀ずと雖も、妄雲猶覆う。而るに一息追がざれば千載に長く往く。何ぞ浮生の交衆を貪つて、徒に仮名の修学に疲れん。須らく勢利を抛つて、直に出離を悌ふべし。』」

「定水を凝らす」とは心を水にたとえたので、妄念雑念のおこる心、波立つ心を静かにして悟道に入ろうとせられても、識浪はやむ暇はなく、「心月を觀ずと雖も」心に真如法性のさとりを月をやどそうとしても、「妄雲猶覆ふ」煩惱の雲は晴れる時がない。「而るに一息追がざれば千載に長く往く」一息の命すらあてにすることは出来ぬ。何というはりつめた、せつぱつまつた目覚めであろう。清らかな世界で清らかな自分を見、清らかな聖道のさとりに入ることの出来なかつた聖人は、一切宗門、一切の仏に4見はなされて、再び新しい道に出でねばならなかつた。

「建仁第一の曆春のころ、隱遁のこころざしにひかれて、源空聖人の吉水の禅坊に尋ね参りたまひき。是れ則ち世くだり人つたなくして、難行の小路迷ひ易きによりて易行の大道に赴かんとなり。」(御伝抄)

一度は世の中から山へ隱遁した聖人は終に、二度、山から世の中へ隱遁せられたのである。そうして吉水の教団で、人間のありのままが救われてゆく念仏の行者とおなりなされた。

ほんとの道に出てゆく者には一度は、嫌な汚いこの世間を棄てて、山の上へ逃げたい心が湧いて来る。そうして現実から理想へのたどりの心が動いて進もうとする時、一番自分というもののほんとうが見えて来る。聖人の二十年の生活は無駄におわつたのではない。この聖道の歩みによつて、ほんとうの人間としての裸形の姿を見るこゝとが出来たのだ。高い世界を築き、清い心で、清い世界に住むことが出来るかとの望みは打ち崩れて、道がはつきりすればするだけ、見れば見るだけ罪深い煩惱成就の凡夫ではないか。人は一度は祈りの時代がなくてはならぬ。自分の見えすいて来る時がなくてはならぬ。世の中には、明るい胸から、ちつとも否定も目覚めもなく、そのまま信仰に入ることが出来るように思う人がある。邪見外道でかたまつた胸が、真理のメスで切られる時、一度は暗くなる胸である。私の善も間に合わぬ。私の弄ぶ哲学も間に合わぬ。久遠の本性を抱いて泣いてこそ、そこに法蔵菩薩の願力も生れたま

い、そこに尊い信仰も湧いて来るのである。聖人二十年の聖道の歩みこそ、聖人を深い世界につれてゆき、七百年の今日、深い感化を残したもうことが出来たのだ。二十年の血みどろの時代は断じて反古ではなかつたのだ。

王舎城の中には今を盛りと、最も重い五逆の大罪悪が行われて、この世からなる地獄である。父なる王頻婆婆羅王を殺し、更にそれに食物を与えた王后韋提希夫人を七重の牢におしこめ、仏敵をなす提婆と深い交りを結んで、あらゆる血なまぐさい乱行に心を奪われているのは阿闍世王である。阿闍世王を中心に (一) 父を殺し (二) 母を殺し (三) 仏身から血を流し (四) 阿羅漢を殺し (五) 和合僧をやぶるという五逆の火の手の唯中に、釈尊は耆闍崛山の法華経説法の会座を一時没して、この五逆の火の中の人を救いに来られて、ついに韋提希のために阿弥陀仏の救済を説かれた。そうして、七重の牢にいまのままの中に、仏陀の大慈悲に救われた。これまさしく、山より巷へ、山より社会への仏の還相である。阿弥陀仏の絶対他力の救いは罪惡にまみれた巷の宗教である。山から里へ、琴と共なる人間の救済である。

工場の機械の騒々しい音がする。自動車の警笛の音が耳の底へ響きこむ。自動車の鈴、汽車の汽笛、大工の槌の音、商人の算盤の音、教室で子供に教えている先生の声、金魚―金魚、金魚売りの声、木樵りの歌の声、兵士の教練の音、芸者の三昧の音、事務員のペンの音、医師のメスの音、それらの音にまじって人間の笑う声、笑う顔、泣く声、泣く顔、怒る声、怒る顔、成功して得意な顔、内閣をなげ出した、にがりきつた大臣の顔、子供が生れて喜ぶ家庭、世をはかなんで自殺する人、雑多な、複雑な世5相がなつかしく輪回して来る。

工場の中にも、会社の椅子にも、稲の出来つつある田園にも、御殿のようなお邸の奥にも、何処に行つても、なつかしい同胞たちが幾人かは泣いている。

道を求めて出ようとすれば、家を捨てて出ようとすれば、そこには、幼い幾人かの子供が腰にさばる。病む妻が薬を求める。老いたる親は飢えを訴えて食を求める。それをどうして振り捨てて山へ登ることがゆるされよう。小さい庵の生活が与えられよう。こうしたなつかしい哀れな日暮しの中にも、光は与えられなくてはならぬ。尊い光は見出だされねばならぬ。

街の裏の貧民窟には、若くて夫に死に別れ、力とたのむ子供には先立たれ、病氣のために財産は一文もなく、食うや食わずの中に消えてゆく日を待っている不幸なる老女もいる。その人の胸にも、尊い世界は与えられなくてはならぬ。

刑務所の中には、一時の怒りに目がくらんで、人を殺し、死刑の宣告を受けて絞首董の露と消え果てる日を待ちつつ、罪の恐しさに懺悔の涙に暮れている人がある。その人の心にも尊い世界は与えられねばならぬ。

かくてありのままの社会の唯中へ再びかえって来た一切の人に、そこで生きる道を見出せなければならぬ。

救いとは高い世界へ自分をつれてゆくことではない。低い世界へ、高い光が訪れることである。

聖人のみ口から念仏が出た時、聖人は決して高い所にはいなさらなかつた。地から湧いた凡夫として、救うべからざる愚禿として大地にひれ伏した、なつかしい衆生としての聖人であつた。古からの聖者にくらべた時、目覚め果てたものの心の内はあまりにも煩惱の衆生であつた。これは決して聖人が凡俗であつたのも、無智であつたのでもない、悪人であつたのでもない。魂の聲の鋭い方であつたのだ。

法蔵菩薩とは、如来が、衆生の久遠の暗に來りたもうて、衆生となりきりたもうたみ姿である。光が暗に來りたもうたことである。六道輪廻の地獄の真つただ中へ彼より我に來りたもうたことである。されば、我とおこす、「我が国に生れんと欲ふ」心即ち、欲生我國の心は、それがそのまま如来の勅命であつた。如来の勅命、それがすぐ法蔵菩薩の願力であり、我をつれて全てを超えたもう欲生我國の如来の御心である。

聖人が念仏の子とおなりなされた時は、極悪最下の凡夫、必墮無間の衆生たることを内感したもうた時である。山に登つても決して清くも明るくもなり得ない自分を抱いて泣きたもうた時であつた。念仏は決して清い天上に咲く華ではなくて、低い泥の中に咲く蓮華であつた。善人だとうぬぼれ、智者だと得意になれる人の心に開ける世界ではなくて、罪悪生死の自己をどうにもすることの出来ぬ人の胸に生れる、たつた一つの最後の世界であつた。山の上に見出せる光景ではなくて、地の底に、一切群生の共に住む家庭の中に見出せる光景であつた。

独善主義

世の中を去つて浮世の外に立つことはよいことかも知れぬ。冷やかに世の中を見下して独り清しとするのはよいことかも知れぬ。妻を持たず、子を生まず、唯一人暮すことは、樂は樂であるかも知れぬ。けれどもそれは卑怯なる行き方である。むしろ家を持ち、妻を持ち、子を育てて、人間としての全てを果さねばならぬ。

たとえそうした世界からのがれて出たとしても、私の心の裏を見つめる時、全ての汚さを生み出す心をどうすることも出来ない。私はきつとつまづくであろう。僧院の奥深く閉じこもつて座禅觀念をこらしても、私の心は一步も高い世界へは進んでくれないであろう。否、静かに見つむれば見つむるだけ、あさましい私である。どうして自ら独り清しと澄していることが出来ようぞ。

私は、苦と、悪と、涙の多い私を抱いて、苦と、悪と、涙の多い世の中に出ねばならぬ。そうして十方衆生と共に苦み、共に泣き、共に悩まねばならぬ。かくて私は高い聖者ではなくて、どん底に沈む衆生である。如来はここに来りたもうたのである。見よ。夕が来れば山の麓の家にも電燈が輝く、白木造の御殿の中では、御殿を明るくし、草ぶきの賤が屋では、粗末な家のままが明るくされている。如来は來つて如何なる所にも輝きたもうてある。念仏行者は電燈に明るくされた家である。

煩惱を断ぜずして涅槃を得るとは、こうしたなつかしい衆生と共なる低い世界の救いのことである。十方衆生と共なればこそ、この罪惡の目覚めもあつた。私自身の久遠の自性さえ引き出されたのだ。会う人によつて、見ることによつて、私のほんとの姿が引き出され、見出だされたがいい。世間の全ての様は皆、私自身の内にもつ私自身の姿なのだ。今更に、煩惱を断ぜずして得させて下さる涅槃のさとの尊さを思

う。痛ましくも如来は、私の罪を御自分の罪と感じたまひ、私の罪を救わんために、生死の苦海に來つて弘誓の願船となりたまひ、おん自らのみ名、南無阿彌陀仏の名のりを、このどん底に沈める私の煩惱の裏にあげたまひ、來つて我が信念となりたまひであつたのだ。

私ははじめに「今一つは、在家の姿であるままの中に、農業を営み、商売で渡世し、呪いも戦いも争いも、全てがある今日このままの中に、尊いものを見出して行く道である」と言つた。この念仏に生きて、浮ぶも沈むもまかせ果てた世界のことである。

高い世界に出ることが出来ないで、かえつてどん底に沈みはてた自分に目ざめはてた者は、高い眼で他人を見下げようとする聖者の冷たさがないから私はなつかしい。私は、悪人だからというので、人から去つて行くことは思わぬ。「悪人よ」とお互に泣きつつ近寄つた時、人は一つにとけあつた世界を見出すことが出来る。いかめしい鎧を着て、威儀を正してお大徳をきめこんだ方や、あまり悪いことをしたこともなく、小さい善が出来たために、高くとまつている方の前では、息のつまるような窮窟さと、装われ飾られた乾からびたよそ行きの虚偽の世界しか表れぬ。私は、あさましい獣のような様をそのまま出して得意になる卑下慢になれというのではないが、久遠の本性を見出して、一切の垣のとれた、赤裸々な、装わず、飾らず、これがよいのだと我と我がゆるさず、如来によつて救われ、如来の心に蘇つた人こそ、一切を共に語り、共になぐさめ、共に生きて行かれるほんとの同胞ではあるまいか。

けれども、ともすれば私は、聖者のように高く、哲学者のように傲慢に、人を善悪によつて裁き、他人を理論で見下げようとする。その我が心が、閃きたもう如来のみ7心によつて打ちくだかれ、打ちくだかれて、生きさせて頂く。

人は皆、今いるそのそれぞれの場所、それぞれの境遇、それぞれの世間を去らなくともいいのだ。そのままでもいいのだ。

十人が十人、百人が百人、皆理想的な妻も持たれまい。百人が百人理想的な夫も持たれまい。出来た子供が皆孝行息子でもあるまいし、待つた兄弟の全部が立派な人でもあるまい。お天気だつて、晴れる日もあれば、曇る日もある。家庭も三百六十五日笑うて暮す日ばかりは続かない。勢いのよい日もあれば、消え入るような日もある。家だつて栄える時もあれば屋敷さえ売り払うように衰える時もある。

そうしたそれぞれの中に住みながらも、それがそれでおおらずに、その中に尊い世界を見出さねばならぬ。不幸なるが故に目覚めた人もあれば、子供を失うて信仰に入つた人もある。ゆるすべからざる罪惡に陥つて、終には念仏行者になつた人もあれば、病氣に伏して永遠の世界に出た人もある。

一見すれば人生の全てに破れたように見える老婆の中に、終に人生の勝利者たる幸福の把持者がいる。あらゆるものに破れて、あらゆるものに勝つたのである。

かくして大地の上に生れ出で、大地の上に一切衆生と生きつつ、そのままに救われ、そのままの中に念仏し、そのままの中に生きぬく道こそ、大乘仏教の極致であり、人間最高の最後の世界である。かくして大地の上は如来の園林遊化地であります。

如是観

一、ソクラテスの弟子

「我が師、ソクラテス以上の智者があれば知らしめたまえ。」とソクラテスの弟子がデルハイの神様に祈りました。神様の御託宣は、「ソクラテスが世界一の智者である。」とのことでした。然るに、ソクラテスは常に自らを愚者だ。何もわからぬ男だと思つています。各方面に出て、いわゆる智者と意見をたたかわすに一度だつて敗けたことがない。それなのに、ソクラテスは愚者だと思つています。弟子は考えました。そして

「神は、自ら愚者と自覚せる人を唯一の智者とせられたのであるわい。」と覚りました。

二、愚者

今の時代にはこの愚者を容易に見出させませぬ。大概是、自称、智者であり、賢人であり、善人であります。物のわかつた人がそろつています。ほんとに道を求めに出かけた人は何時も「無智の処女地」に立っています。わからぬから求めます。進みます。愚者であると自覚した者は、自分を偽ることを一番きらいます。自らを偽る人は真の幸福から遠ざかります。

三、真の幸福

ソクラテスは「掛け値のない生活が一番幸福だ」と言つたそうです。単純な真理であります。簡単でも短くても真理は真理だから仕方がありません。金がないのにある風をしたり、地位や名誉をこと更に張りたい人は常にこの真理を反古にして苦しんでいます。掛け値をつけるのは商人ばかりではないのです。掛け値があるほど、人が卑しく見えて来ます。倫理じゃの、哲学だのと、むずかしいことに骨折つてもこうした世界がわからぬ人は、救われるには遠いのです。

四、信ずる心

信じられようとはするが、信じようとはせぬ。尊ばれようとはするが、尊ばうとはせない。信じられることよりは、信ずることが困難である。尊ばれることよりは尊ぶことが困難である。信じられる者よりは、信ずる人の方が尊い。信じていた時、信じた者が裏切つても、それは、裏切つた者の価値が下つたので、信じた者はやはり尊い。

五、実質と価値

人は資質以上に価値を見せようとする。そこで金箔をつける。金箔は一日保つ、十日はげぬ。時には数年もてる。しかし時には一日してはげる。十日で光がうすれ、一年で素地が出る。その時には、実質以下に価値が下る。

生きていくということは、価値を世間から見てもらうためではない。価値を高く認めてくれるように努力するために生きていくのではなくて、実質そのものを高めるためである。世間が何と見ようとも、実質そのものを高め、実質そのものの光を増すが向上であるならば、実質が下って行くか、光がうすれる時、墮落という。

墮落する人間が、自分の上に金箔をつけて、価値だけを高く見てくれるようにする。それを偽善という。偽善は墮落者につきものである。

六、道徳と信仰

鉄はほつておけば腐る。だから磨かねばならぬ。磨くと光が出る。鍬は鍬でみがき、釜は釜で、鉄瓶は鉄瓶で、刀は刀で磨かねばならぬ。それが道徳である。

しかし磨いても磨いても軟鉄は軟鉄で、鋼でも磁石でもない。もし軟鉄を火中に入れて焼き、急に冷せば鋼となる。軟鉄を磁石棒ですつてやれば磁石になる。人も強い智慧光に照らされて、一度全否定のどん底に立って来ると真実の信仰が出来る。信仰は質の変化である。

七、そのままの中に

小役人である者は、小役人であることに失望し、百姓は百姓であることを悲しみ、教員は教員であることを灰色に思う。そして、百姓は商人に、商人は官吏に、官吏は政治家にそれぞれ変わりたいと思う。変わってもいいが、然し、真に小使いに生ききつて、そこにほんとの天地を見出せば、悪政治をして天下に恥をのこす大臣よりも、一向流行らないで悲観している医者よりも、輝いたものであり、真の幸福のあることを知っていたい。職業に高下のないくらしいのことは今更言わなくてもいいが、職業によつて幸、不幸がわかるものではない。

八、

生れつき短気な人には、腹のよく立つのが悪い変わりに、さつぱりとしたよいところがある。おちついた人は、のろみであるかも知れないが、やつたことに無駄がない。腹が立つのを苦にするより、さつぱりした所を生かして使い、のろみであることを叱らずに、やつたことが確実であることをほめ、口数の多いのを殺さずに、その口をよいことを伝えるために生かして行つたら、天下に何一つすたりものはない。それが全ての生きる道である。悪い方を見て棄てたら良い方もなくなる。万物ことごとく良い方面と悪い方面を持っている。如来の慈悲の不可思議なるお救いをいまさらおどろく。悪に強い者が救われて善に強い人になる。

九、病根 その一

自分ほど賢い者はいない。自分のしたことほど正しいことはない。自分には一点のまちがいないと思っている者がある。こんな人を我の強い人だという。こうした人には進歩も発展もあり得ない。口を開けば自慢であり、自己吹聴である。何時の程にか世人から嫌がられる。

十、その二

家内の悪い家がある。「御免なさい」と入つて見る。御挨拶に出た主婦さんのお顔を一目見ると、陰険な高慢ちきな風が見える。人の忠告も意見も全部しりぞけて、人が褒めると高慢得意になり、人が忠告がましいことを言つたり、そのやりかたを批難すれば真赤になつて腹を立てる型の女である。家庭の面白くない病根はここにある。

十一、その三

息子の嫁を五度も六度も取り替えさす母親がある。そうした姑ほど、嫁の悪口を外に出て言うものである。そうした女ほど子供には孝行を強いる。親不孝者の出来る病根である。

十二、その四

甘い料理の出来た時、一口「おいしいなあ」といい得ぬ夫の家では、奥様の顔の晴れる時がなく、その料理は段々下手になる。

十三、その五

自分の子供をでも、弟妹をでも、妻をでも、頭から「馬鹿」と叱りとばす男がいる。お言葉通り子供も妻も馬鹿になる。学校の教師と児童との間でもそうである。

十四、その六

此方の悪事、欠点、秘密を彼方に、彼方の短所、失策、秘密を此方にと、移さねば気のすまぬ女がいる。その地方での邪魔者扱いである。こうした娘が嫁入るときつと離縁になる。

十五、その七

何かの集合で集ればすぐ酒を飲む風習の村がある。こんな村ではいわゆる有志なる者を教化することは不可能である。何会がその村に生れようと、如何なる名士が乗り込まうと青年団があれば聞いたらよいとか、婦人会員によいお話だとか、人をおさめようとする者ばかりで村の文化の進む心配はない。

十六、その八

財産貯蓄競争の大変激しい村落がある。宴合の席次争いのきびしい村がある。そうした村には争い事のたえることはない。

十七、その九

選りに選つて妻を娶ろうとする男がある。美しいのを鼻にかけて、随分と理想の高い女がある。こうした者たちのうちに一番、格別悪い夫をもつたり、醜い妻を待った者が多い。それで満足が出来れば結構だが、一年不平のうちに暮しているのが多い。

十八、その十

一攫千金という。一鍬おこしを考え、働かずして金を儲けることを知った男の惨めな有様をあまりに多く見せつけられる。派手に金を集めた者は、不真面目に金を使う。この頃のような不景気時代はこうした人への鉄槌である。

十九、道は近い

ある寺院(それも相当新しいと言われる人の集る寺院)へ講演に行つて、二度私の下駄を盗まれた。道を求めに来たのであろうか。遊びに来たのであろうか。講演先きで、雄誌や書物を出して、勝手に取らして、勝手に代償を支拂ってもらうと、半数も金が集らぬことがある。私は寂しい思いがする。道は遠いところにはない。寺院は、極楽参りの切符を安売りする所ではない。悪人を救う道場である。

二十、

自分という者をちつとも知らないで、信仰沙汰をしたり、議論をしたりする世界には、もう飽いできました。心の眼が開いて、自分をほんとうに知る道に出た者は、最後に何もいう言葉をもせぬ。自分を知りつくした者が、心から信ずることの出来る先覚者の前に出た時、その一言二行はその人を育てあげる生きた金言となつて響きます。

女人成仏

寂しき妻

「旦那様は今頃どうなさつたのだろうか。今日も会社からまたいつもの嫌な所へ御回りになつたのだろうか。ああ今日で五日、毎日お帰りが夜の二時。今晚ももう十二時過ぎたのに……。」

苦しい胸の裏、言うて行くところもない。親里へ言つてやつても古い思想の両親は、「何不足のないところへ行つて養つて頂いているのだから、それ位のことには辛抱せよ。」と言つてとりあつてくれない。自分の夫に愛がないわけではない。けれどけれど愛する夫が他の女性を愛していることをどうして悲しまないでいられようぞ。あまり世間に知れたら夫の恥、誰にも御相談も出来ぬ。苦しい恨しい心の火をどうにかおさえて忍んでいるのを、世間の人は、よく出来た奥様だと感心してくれる。けれどこの胸がどうしてそんな美しい胸だろう。

噫。何時になつたら御主人のこの道草がやむだろう。芸者買い、妾、思い出しただけでも今日の日暮しが暗い。

こんな悲しい痛ましい生活に毎日々々悩み続けている婦人はいないか。

女性運動

第一「あなたは女に生れたことを感謝していますか。」

第二「今迄、女に生れてよかつたと心から思ったことがありますか。」

第三「もし女子であることがお嫌でも、何か幸福な条件で御日暮しさせたら、女子であることを喜んでくれますか。」

この三ヶ条の質問をかなりたくさん女性の前に提出して、お心を聞かして頂きました。けれども私は悲しまずにはいられません。その大部分の方々、ほとんど全部が、女であることを感謝してはいなさらないのです。過去にも女であることを悲観し、現在も不幸なる女であることに泣き、未来如何なる条件を与えられても女たることを感謝することは出来ぬと言うに至つては、私はついに女性を救うべき何ものをも見出すことが出来ぬ。女性全体の幸福は

第一 女子教育の向上

第二 男女貞操の厳守

第三 女子に対する男性の態度の改革

第四 女子参政

そんな問題の解決によつて、あなたの幸福は外的に与えられるであろう。しかし人の真の不幸は断じて社会の条件が改められさえすれば与えられるものではない。真の幸福は人の主観の事実である。よし前に掲げたような条件が解決されたとしても、それは来るべき社会の女性の幸福であつて、血みどろな今のあなたの救いではない。

男子にしいたげられたる女性には叫ばねばならぬ。女子の自覚をうながし、男子へ12
向つて真に女性の声を聞かせ、女子自身の衷心の願いを叫ばねばならぬ。

しかし、あなたは、今数人の子供の母であり、家庭における主婦である。社会運動家であるよりは、もつとあなたは多忙であり、真剣である。ぬきさしならぬあなたが、今、女性としての運命を呪つているのである。

あなたは高等女学校、師範学校、時には女子専門学校の教育を受けた。そうしたあなたは、無教育なるが故に泣いているのだとは言えない。高等教育を受けた学究的なあなたは、女子職業家、あなたは女性の羨望の的であつたかも知れぬ。

けれども女性なるがゆえに結婚を考えずにはいられなかつた。老嬢になつたあなたが、焦りぎみになつたあなたが、結婚した時、あなたもまた普通の女性の道を行かねばならなかつた。無教育な夫、破倫乱行の夫、酒癖の悪い夫、無理解な姑、あなたがただの妻となつた時、過去の教育も理想もひとたまりもなく崩れてしまつて、自分の受けた教育すら疑いたくなつた。こうしたせつぱつまつたあなたに、女性改造の社会運動がまにあうだろうか。

虐げられたる女人

三千年昔から、女性は男子のおもちゃのように思われて、男子の横暴勝手な力に弱められてしまつてきた。それは決して私が地上の歴史をくつて今さら言うまでもないことである。そうして大正の今日もいかに多くの女性が男性のために泣かされているか。女性ゆえに泣いている男性は少ない。けれども男性ゆえに泣いている女性

のいかに多いことか。弱い女性、男子の力を借らねば生きてきえぬ弱い女性が、美しく装うて男子の愛をつなごうとする様のいかに悲惨であることか。地上の女性はいかに、女としての宿命を悲しみ、泣いて恨んで、あきらめてゆけばよいのであるうか。心から女なることを感謝し、女なるがゆえに、女たることを喜びし、誇りうる世界はないのであろうか。

悪人、女人という。蓮師すら「それ女人の身は五障三従とて男にまさりてかかる深き罪のあるなり。」という。女性ならざる私には、女性なるがゆえに罪深いとは思えぬ。しかし女性が罪深いとすれば、何がゆえに罪が深いのか。しかして女性の罪が男性の横暴不道徳に根ざしてはいまいか。

男子は外に出る機会が多い。広い世間に出て見聞も広い。行きづまった心も自然と開いてくることも多い。けれども、女子は、きわめて細かな心情を要する育児のため、そのほとんど人生の半ばを費やし、常に狭い家庭のうちに閉じこもつて、ふさいだその心を晴らす日もなく、料理よ、裁縫よ、と使われている間には、自然に愚痴にもなり、瞋恚の心も増して、見るもいたましい、魂の扉をとぎした、救いがたい者となつたのではあるまいか。

家庭の病の根になつている老いた女性を見る時、まず、罪深き救い難き女よと責め、嘲笑する前に、彼女の前半生の涙の物語を聞きたい。

陰険なその顔、救いがたいその眼光、恐ろしいその言葉尻、灰色に曇つたその顔、ああいつたいそれらは何によつて作られたか。その裏には何があるのか。

語りたまえ。法姉よ。あなたよ。御身だとて、どこかへ行つて、その胸の厚い固い殻を破つて、その底の涙にふれたいのだ。思うさま、泣いて泣いて泣き晴らしうる世界がほしいのだ。

不安なる安心

あなたに、「淋しいことはありませんか。たつた独りだと泣いたことはありませんか。」「女であることを悲しんだことはありませんか。」「と問うた時、「いいえ別に何も」それがあなたの第一のお答えであつた。けれど、そのあなたのお言葉には権威がない。それもやはりあなたのつつましやかさが言わせることであつた。

赤心を吐露して、あなたの心の底にふれていく時、人間以上のある光と力があなたの厚い固い殻を打ち破つた時、「いいえ別に何ともありません。」「の聲は断じてあなたの声ではなかつたのです。赤裸々なるあなたの心の底をくむ時、いやすこともできない痛手、くめども尽きぬ悲しい涙が、人知れずしぼられているではありませんか。そうしてこれらから救われる世界はないものだとはいじらしい健気なあきらめが、ついに今までのあなたを作っているのです。今日一日一日を、壊れかけたガラスびんを使うような、姑息な不安と、姑息な安心とで生きているのであります。

その不安なる安心を打ちくだけ！ その涙をごまかすなかれ。あきらめな。そしてとどまるな。

絶望のあなたに

あなたは女性であるがゆえに泣き、女性であるがゆえに人生の敗北者だと悲しみ、さらに女人悪人の暗い世界におとしいれられて、救い難い者にされてしまった。そうしてこれでああなたは、「しかたがありませんわ」と運命論者になつて、死から死の道をたどろうとする嫌なあなたになつてしまった。しかしこれだけであなたに死の幕が下りてもいいであらうか。受け難き天地人三方の恩恵が台なしに葬られてもいいであらうか。

じつと眼をつぶつてあなたのお顔を次から次とたずねる時、福山市の券番の楼上広間にうち並んで、私の講演を聞いて下さった芸者のあなたの顔が見える。深い悲しみをどん底に見せた顔、絶望をそのままに眉に盛つた顔、自覚も苦も知らぬらしい浮いた顔、あこがれるように耳をかたむけた顔。

「地上の淋しさと、人の尊厳」あなた方の一人でもが、私の話を聞いてくれたことをうれしく思う。「人はだれでも尊いのです。何をしても、何に汚れているようでも、その底には尊いものが輝き出るので。自分を粗末にしてはならぬのです……いかなる痛ましい傷ついた胸でも尊いものはあらわれて下さるのです。」と語らねばならなかつた私は、今さらにあなたの胸の急所をついて、絶望しているあなた（あの内の一人でも）をこの上打ちのめす気にはなれなかつたのです。そうしたあなたの血みどろな罪の世界のただ中にも尊い世界が生まれ、そうした世界にも尊い法の水がふき出して微笑むことができなければ、地上は永遠に呪われてあらねばならぬ。

女性と範宴

京の町を出てあちらこちらと用事をすませて、夕暮方を叡山に向かつて帰りを急ぐのは若い範宴（親鸞聖人のこと）である。

山にとりついた時、とある祠の陰から、若い美しい処女が打衣に顔をつつんであらわれてきた。

「もしもし御出家様、御用でございます。」

「私にでございますか。」

若い範宴はおどろいてふりむく。

「おりいつてのお願いでございます。どうぞ私をお山におつれ下さいませ。私は生死の一大事が気になつてなりませぬ。女は三世の諸仏にも見放された罪深い身と聞いております。私はそれに目がさめたのでございます。私も救つていただかねばなりません。叡山は尊いみ法を説かれる所と聞いております。どうぞご出家様、ご迷惑でもお連れ下さいませ」

若い範宴の胸には、この見知らぬ女性の真剣なる魂の目覚めの声が、びしびしと胸に響く。範宴には何と言つていいか答える言葉がない。

「……………」

「御出家様、お許し下さいませ。この通り手を合わせて拝みます。」

「御婦人様、それはとてもかかないません。御承知でもありません。御承知でもありません。叡山は女人禁制の道場であります。三世の諸仏に捨てられた女人、男の心をかき乱す女が山に登り

ますと、僧たちの修行の邪魔になります。女が山に登ることは許されてありませぬ。その儀は思いとどまって下されませ。」

「そのことはよく存じております。けれども、私は私の罪惡に目ざめたのでございませぬ。じつとしていられませぬ。格別をお願いをいたすのでございませぬ。」

若い女はシクシク泣いている。

「それはなりません。山の制約でございませぬ。女人の身は一步も足を入れることになりませぬ。」

「でも御出家様、お山にも鹿もいましょう。猿もいましょう。鳥獸の牝がすんでいくらいで、人間の女が登れないことはございませぬ。どうあつてもお聞き下さい。」

「……………」

「お山を開きあそばした伝教大師は、お徳のすぐれた尊いお方と聞いております。女の救われない法をお説きあそばすはずはありませぬ。もし男のみが救われて仏になる道をお説きなされたのなら、伝教大師は真実に尊い聖者ではないのです。いや、いや、そんなことはない……………」

「何とお言いなされても…………私の力にはかないませぬ…………」

女は大地に伏して拝みつつ、泣きつつ、ひたすらに願っている。ついに範宴は立ち去って行くこうとする。女は走り寄ってそのたもにつかまろうとする。範宴は女からのがれたが、後からは地軸にとおるような呪われの泣き叫ぶ声が聞こえる。

「おお、どうした矛盾であろう。罪深いがゆえに救われねばならぬ。罪深いと泣く女人こそ救われねばならぬはずだ。どうやら山の教えでは救われない気がする。」

若い範宴の胸には、言い知れぬ悶えと苦しきとが、おしつまつてくる。山を去りたい思いはいよいよはつきりしてくる。

私の胸にはこうした光景がなつかしく浮かんで来る。女人ならばこそ救われねばならぬ。

女人成仏

「設い我仏を得んに、十方無量不可思議の諸仏世界に、それ女人有りて、わが名字を聞きて歓喜信樂して、菩提心を発し、女身を厭惡せん。寿終の後また女像とならば正覚を取らじ」

これは法蔵菩薩によつて説かれた四十八願の中の第三十五願、女人成仏の願であります。

悲痛な真剣な願いは、それをきかれる世界がなくてはなりません。女子であることそれ自身について泣いているあなたに、これが聞かれる世界がなくてよいでしょうか。女人そのものを厭惡している人に、どうして女性運動が間にあいませぬ。

弱い者にほしいのは力であります。弱い女性にどうして力が与えられないでよいでしょうか。如来のこうしたお誓いは、女性たることを厭うて泣いているあなたへの特別のお涙であります。

今のあなたは純な心を失つて、偏屈になり、心のひがみ易い人になつているかも知れません。あなたはそれを当然のこととしてゆるさずに、静かに「女人成仏」をお誓いなさつた如来のみ心を聞かねばなりません。

今のあなたは、心の傷の痛手にたえかねて、ともすれば涙の子となろうとしています。いつまで泣いていたとて、心の傷は癒えませぬ。そのあなたの心の傷をご自分の苦悩として女人成仏を説いた、仏心を受け入れなくてはなりません。

腹がたちやすい。ひがみやすい。嫉妬しやすい。そうした心であなたの心はますます苦しみます。その心に勢いをつけて、救いから遠ざかることは恐ろしいことです。そのどうにもならぬ心をつめましょう。そうして、しかたがない、これだよいのだと邪見におち入らないで、そうしたあなたをこそ本願のお目あてだと、呼んで下さる如来のみ心を知らねばなりません。

罪深いと泣き、不幸だと泣き、さびしいと泣く、そうしたあなたの心の底には、仏は血みどろに働きたもうてあります。善人が救われるならば、悪人はいよいよ救われねばなりません。悪人こそお目あてだとは、どうした有り難いことでしょうか。

静かに南無阿弥陀仏のみ名を呼ぶ時、如来はあなたと一体であります。道を求めて出発してこそ、あなたの一生は女性なるがゆえに感謝しうるであろう。罪の報いは地獄ではなくて、やがて恩寵であり、成仏であります。大慈悲なるがゆえに。